目白大学　人文学研究
第17号　2021年　1－15

「狂人日記」の構造に秘められた意味とその主題

The Meaning and Theme Hidden in the Structure of *A Lunatic's Diary*

張　瓊華
Qionghua ZHANG

Keywords：a cannibalistic society, criticism of Confucianism, enlightenment, self-denial
キーワード：人食いの社会、礼教批判、啓蒙、自己否定

１．はじめに

中国において、1910年代は、数千年も続いてきた封建的王朝時代から近代国家へと移行する時期である。1911年に辛亥革命、1912年に中華民国の誕生、1915年に袁世凱による帝政復活宣言、1916年からの新文化運動、1917年からの白話文運動などの出来事が相次いで起こる中、民衆を啓蒙し、その意識を変革させる役割を担う近代文学もついに誕生した。その嚆矢となる作品は、1918年に陳独秀が主編した『新青年』第４巻第５号に掲載された魯迅の短編小説「狂人日記」である。この作品は、中国近代文学史上で初めて白話文で書かれたものであり、封建的な礼教を批判したものとして捉えられているため、近代文学の始まりと見なされている。しかしながら、この作品がきわめて難解であり、発表されてから百年以上も経っているにもかかわらず、充分に解読されているとは言えない。本稿では、「狂人日記」の内容と構造を詳細に検討し、そこに秘められた意味と小説の主題をこれまでの研究と異なる視点で解明することを試みたい。

「狂人日記」は序章と13章の日記によって構成されている。序章は、古文体で書かれており、「余」という一人称の語り手によって簡単に日記の由来と公表の目的を次のように語っている。「余」は中学時代の友人が病気になったと聞き見舞いに行ったが、その人がすでに病気が癒え、役人の候補としてある地に赴き、社会に復帰した。病中に書いた本人による「狂人日記」という題をつけられた日記を手に入れたが、意味不明で、荒唐無稽なことが多いが、医学の研究に供するため、公表するとしている。一方、13章の日記本文は、「我」という一人称の語り手が白話文で書いた独白体のもので、「我」が見た人食いの社会と「我」が人々を改心させるために取った行動、そして「我」の自覚などによって構成されている。

ちょうけいか：外国語学部中国語学科非常勤講師

この小説には、古文と白話文の２つの文体、複数の語り手、現実の人食いと象徴的な意味の人食い、現在の出来事と歴史書に記載されているもの、噂と妄想、瘋人と狂人の２つの呼び方などが内在している。したがって非常に理解し難く、それを読み解くのが容易なことではない。とりわけその主題は論者によって解釈が異なっている。

中国国内では、伝統的家族制度と封建的礼教を批判することを「狂人日記」の主題として捉えられている。例えば、鄭万鵬は、「『狂人日記』は新文化運動の矛先を示している。新文化運動の指導者たちは、批判の矛先を真っ先に中国の家族制度に向け、中国の家族制度の文化を打ち破ろうとする」、「狂人は中国の家族制度を批判すると同時に、家庭倫理から発展した社会理論に対しても批判し、『仁義道徳』を『人食い』と見なし、儒学の核心を否定し、中華文明史を否定した」と指摘している（鄭万鵬、2007、28～29頁）。また、魯迅自身もかつて「狂人日記」の主題について、「家族制度と礼教の弊害を暴露する」[1)] と述べたことがある。しかしながら、この主題を作品から必ずしも完全に読み取れるとは言えない。21世紀に向けた高等教育の教材である『中国現代文学史1917-2013』の中でも次のように指摘している。「たとえ今日においても、『狂人日記』は充分に解読されていない小説であり、小説の主題について、作者の「家族制度と礼教の弊害を暴露する」との注釈があっても、後の読者にはやはりよく分からない」と叙述している（朱棟霖等、2014，55頁）。

このように、中国では、狂人による「反封建」、「反礼教」を小説の主題とする傾向が見られるが、やはり完全に解読されていないのである。その原因は、２つがあると考えられる。１つは、「反封建」、「反礼教」の小説だという先入観を持ちながらも、日記本文からはそのような内容を必ずしも読み取れていないからであろう。もう１つは、日記本文を重視しているが、序章についてはあまり検討されてこなかったからであろう。全体的に見ると、狂人の「我」を礼教批判の戦士と見なすならば、むしろ序章がないほうがすんなりと分かるであろう。逆に言えば、序章で狂人の「社会復帰」を述べた以上、果たして狂人を「反封建」、「反礼教」の戦士だと言えるのであろうか。つまり、序章と日記本文とは矛盾しているかのように思われる。では、その矛盾しているところに一体何が隠されているのか。「狂人日記」の主題を解明するには、それを明らかにする必要があろう。

日本では、「狂人日記」について、日記本文と序章を含めて考察したものがある。狂人の社会復帰について、代田智明は、「狂人日記」の抱えている射程は「内面」の発見であると指摘している。また、狂人の結末については、「目覚めた啓蒙者が、自らの加害性を認識せずに、社会に対して改革を叫ぶことは、その過程で大きな蹉跌を踏む可能性が高い」。「テクストにとって『反封建』『反礼教』というテーマが中心であることに異論はない。だが、『自覚』によってもたらされた深刻な陰翳が、近代化に向けて啓蒙に努めようとしている仲間たちに対して、隠された警鐘として物語の片隅にそっと差し置かれたのではないだろうか」と解釈している。（代田、48～49頁）。しかし、この研究は「我」が自分の日記を「狂人日記」と題したことについては触れてはいない。

また、伊藤虎丸は、「『狂人日記』を、留学期の西欧近代文芸との出逢いを契機とする最初の文学的自覚から始まる一種の自伝的告白小説」として見ている（伊藤、224頁）。魯迅は、自ら加害者であったことを知ったと同時に、独り覚めた「精神界の戦士」たる「客気」からも、また「被害者意識」からも解放され、やっと、「英雄」でも「被害者」でもない普通の人間になれた。それによって、「狂人」は社会に復帰できたと指摘している（伊藤、226頁）。だが、もし、自伝的告白小説であれば、その後の魯迅も引き続き小説を書き、吶喊していたことを説明することができないのであろう。

このように、日本での研究は、日記の序章で語っているものを射程に入れつつ、狂人が自分も加害者であることに気づき、啓蒙者たちに警鐘を鳴らし、社会に復帰したと指摘している。これらの研究は新鮮な視点で作品を検討しているが、狂人自身がそれまで書いた日記を「狂人日記」と名付けたことを見落としている。中国語の「狂人」と「瘋人」（瘋子）は決して同じ意味ではない。「瘋人」は、ほとんど精神障害者という意味で使われているが、「狂人」は、精神障害者というよりもむしろ生意気や傲慢の意味合いが強い。それ故、自分のそれまでの言動を記したものを「狂人日記」と題したというのは、「自覚」というよりはむしろ自己否定していると考えられる。また序章において、「余」は日記公表の主旨が医学研究に供すると語っている。それならば、そこには何らかの病が存在しているはずであろう。

「狂人日記」は魯迅の小説集『吶喊』に収録されている。魯迅自身は『吶喊』の目的について次のように語っている。「なぜ小説を書き始めたかというと、10数年前に、『啓蒙主義』を抱き、『人生のため』でなければならないと思っており、しかもこの人生を改良する必要がある。僕は、小説が『閑書』と見なされ、しかも『芸術のための芸術』の『暇つぶし』という新しい言い方を非常に嫌っている。ですから、僕は大体、病態社会に生きる人たちを題材にしている。目的はその病を暴露し、治療の喚起をすることだ」[2)]。ここから分かるように、実際、魯迅は、人々が患っている「病」を暴こうとしているのである。「狂人日記」は『吶喊』のトップに載せている小説であるだけに、当然その主題も吶喊に無関係ではないのであろう。もしその吶喊は、日記の語り手の「我」によって家族制度と礼教の弊害を暴露すると理解するならば、なぜ「我」は結局役人候補として某地に行ったのか。「我」が吶喊者であるならば、なぜ結局人食いの社会に復帰したのか。社会に復帰した以上、果たして吶喊者と言えるのであろうか。

したがってこの小説の主題を解明するためには、「我」と「余」の役割のみならず、序章を加えた作者魯迅の意図も射程に入れる必要があろう。そこで本稿では、序章を含めて小説の構造を詳細に分析し、そこに秘められた意味と、それぞれの語り手が果たしている役割を明らかにすることで、この小説の主題を再考したい。

具体的には、まず日記本文の前半を通して、「我」が社会とその社会に生きる人々をどう見ていたかを検討する。次に、日記本文の後半を通して、「我」がどう啓蒙しようとしたのか、そして「我」がどう自覚したのかを確認する。最後に、序章も含めて、「余」と「我」の役割や小説の構造を検討し、そこに秘められた意味とその主題を考察する。

2.「我」が見た社会とその社会に生きる人々

まず、日記本文の第１章から第７章までの内容によって、「我」が見た人々とはどんな者なのかを小説の内容に沿って検討しよう[3)]。

2. 1 「我」は誰なのか

第１章では、「我」は美しい月光を見て、爽快になり、これまでの30年余りはぼんやりしていたことに気がついた。しかし、それと同時に、「十分に気をつけなければならいのだ。それは、趙家の犬が、どうして自分をジロジロ見たのだ。我を恐れるのもわけがあるのだ」と記されているように、「我」がまず犬の目つきから恐怖を感じ取った。

続いて第２章では、周りの人の目つきについて書いている。月光が全くないので、変だと感じた。用心しながら外に出た時、趙貴翁も、通りに出くわした人たちも、皆変な目で「我」を見ていて、また「我」の噂をし、「我」を恐れているかのように感じた。前の方でも、子供たちが「我」の噂をしており、その目つきは趙貴翁と同じで、顔色も青黒い。その原因を考えると、恐らく20年前に、古久先生の古い記帳を蹴り、古久先生を怒らせたからだと思う。趙貴翁は古久先生を知らないが、きっとどこからそのことが耳に入り、彼に代わって恨みを晴らし、さらに通りにいる連中とも申し合わせて、「我」を敵視しているに違いない。しかし、当時まだ生まれていなかった子供までおかしな目で「我」を見て、「我」を恐れているような、「我」を狙っているような……分かった。それは親たちが教え込んだのだ。

伊藤虎丸は、「この冒頭の一章で、作者は、作品世界の展開に先立って、まず、これから小説を構想していく視点となる『醒めた狂人』の目を設定したのだ」と考えている（伊藤、205頁）。また、代田智明は「発狂が月を見ることを機縁としたのは、lunaticが意識されたのかもしれない」と指摘している（代田、27頁）。しかし、もし「我」がこの日から覚めた人だとしたら、なぜ周りの人から変な目で見られる原因が20年前のことにあるとされているのか。20年前のことに原因があるならば、ここでの「古久先生の古い記帳」は長い歴史的伝統を象徴していると考える方が妥当であろう。故に、「我」は20年前にすでに醒めた人となる可能性が高いからではなかろうか。そこで、「我」は周りの人々に変な目で見られ、敵視されているということは、「我」が持つ反伝統的な思想が周りの人々に受け入れられていなく、敵視されているからであろう。つまり、「我」は20年前にすでに啓蒙者として活躍していた者になろう。

2. 2 「我」が見た社会

第３章はかなり長くなっている。ここでは、「我」が周りの人たちを以下のように分析している。

> 彼らの中には、県知事に首かせをかけられた者もいれば、有力者にびんたを張られた者もいる。妻が小役人に寝取られた者もいれば、親父やお袋が貸し主に死に追いやられた者もいる。その時、彼らの顔つきは昨日のように怖くなく、恐ろしくなかった。……先日、狼

子村の小作人がやってきて不作を訴え、兄にこう話した。村にはとんでもない悪人がいて、皆に殴り殺された。数人がその男の心臓と肝臓を抉り出し、油で炒めて食べた。それを食べると、肝っ玉が太くなるからだという。我がちょっと口を挟むと、小作人も兄も白い目で我を見た。その時、初めてこの二人が、他人とまったく同じ目つきをしていることに気がついた。

「我」は、周りの人のことをよく知っていて、彼らは社会の底辺に生き、普段権勢者に抑圧されている者ばかりである。それなのに、彼らは「我」を敵視し、まったく無知蒙昧な民衆であり、その上、人を食うのである。しかもその際、食う対象を「悪人」と決めつけ、殺した上、心臓も肝臓も抉り出して食ってしまう残酷な人たちである。彼らは人を食うなら、きっと「我」も食うのであろう。「自分は悪人ではないが、古家の記帳を蹴ったからには、なんとも言えないのだ。彼らが何を考えているか分からない。しかも仲が悪くなると、人を悪人呼ばわりするのだ」。

「我」はさらに追究する。「歴史をひもといてみると、歴史には年代はなく、どの頁にもグニャグニャと『仁義道徳』の文字を書いてある。よく見ると、やっと文字の隙間から『人食い』という言葉が見えてきた。……我も人間なので、彼らは我を食いたくなるのだ」（日記第３章）。

つまり、ここで、「我」がよく追究すると、歴史書には「仁義道徳」が書かれているが、そこからは「人食い」が読み取れる。しかし、小作人が話した「悪人」を食うことは、現実的な出来事よりもむしろ象徴的な意味で使われているのであろう。中国の歴史上での農民革命が、いつも大地主を「悪人」とし、殺したり、財産を奪ったりしたことや、今日の国際社会においても、ある人、ある組織、ひいてはある地域や国を攻撃する際も、たとえば「犯罪者」や「テロリスト」だと公言し、大義名分で取り締まり、攻撃することを考えると、「人食い」は、古今東西を問わず存在していることであり、そもそも人類の歴史は人食いの歴史だと言えよう。

第４章では、さらにその人食いは、赤の他人を食うだけでなく、親族同士の間にも起きていることを語っている。「我」が兄まで自分を食いたいのだと感じた。「我」は、兄が連れきた医者のお爺さんは、「我」の脈を診る際に、肉のつき具合を調べ、一切れの肉をもらうために協力しているのだと思っている。医者はしばらく「我」の脈を診て、「あれこれ考えないで、数日間休養すれば、よくなりますよ」と言い、外に出たら、小さい声で兄に「早めに食べたら」と言った。そして、兄もうなずいていた。何だ、兄もだ！これは大発見だ。予想外だが、意外なことでもない。他人と一緒に「我」を食おうとするのが「我」の兄なのだ。兄が「我」を食いたいのだ。「我」は人を食う人の弟なのだ。「我」は人に食われても、やはり人を食う人の弟なのだ。

ここでの発見は、狂気に満ちたものに過ぎないのであろう。脈を診るのを肉のつき具合を調べていると思っていたことや、本来、「薬を早めに飲んだら」という言葉を、「我」を「早めに食べたら」として捉えられていることは明らかに「我」の妄想であろう。現実に親族同士でも

財産の争いなどで食い合うことがあることから、ここでは、妄想を借りて、人食いは親族間にも起きていることを暴いていると考えられる。

つまり、この章では誇張的な表現を使って、人食いは異なる階層間にも、赤の他人の間にも、そして親族間にも、存在しており「我」も無関係ではないことを表しているのであろう。

2. 3　人食いの歴史

「魯迅の作品は一見リアリズム的に思えても、微妙にリアリズムから逸脱しているものが多い」（代田、14頁）。歴史上、人肉を食うことは、中国にも、外国にも存在していたようである。しかし、この1910年代に書かれた小説で語られている人食いは現実の出来事ではなく、代田智明が言うように、封建的礼教のメタファーとして解釈されている（代田、15頁）。以下では、人食いの歴史について日記本文から検討してみよう。

第５章はかなり短く、簡単に人食いの歴史を辿っているものになっている。

> ここ数日間、一歩退いて考えみた。仮にそのお爺さんが首切り者の変装者ではなく、本当の医者だとしても、やはり人食いの者だ。彼らの祖師である李時珍が「本草なんとか」の中に、はっきりと人肉は煎じて食べると書いてある。彼らは自分たちが人を食わないとも言えるのであろうか。
>
> 兄にも無実の罪を着せているわけではない。彼はかつて我に本を読んでくれた時に、「子を交換して食す」と言った。またある時、ある悪人のことを話していた時、その人を殺す、その肉を食い、その皮を敷いて寝るべきだとも言った。……先日、狼子村の小作農が心臓と肝臓を食ったことを話していた時、兄も平気な顔をして、絶えずうなずいていた。だから、その考え方は昔と同じく残酷なのだ。「子を交換して食す」ことができるなら、何でも交換することができるし、どんな人でも食うことができるのだ。以前は、兄の話す道理を聞いて、あまり理解できなかったが、今、彼がその道理を話している時、彼の唇が人間の脂で塗られているだけでなく、心にも人食いの考えが詰まっていることが分かっている。

ここで触れた李時珍の本は、明時代の代表的な医学書である『本草綱目』であり、実際、中には薬の一種として人間の各部位が挙げられている。また、かつて兄が「我」に本を読んでくれた時の「子を交換して食す」とは、中国語の「易子爾食」という言葉で、出典は『左伝・宣公十五年』である。それは、春秋時代に、宋国は敵に包囲され、食糧がなくなったため、餓えた人々は仕方なく子供を交換して食べたという話であった。そして、ある悪人を殺して、その肉を食い、その皮を敷いて寝るべきという言い方は、「食肉寝皮」という言葉で、その出典は歴史書『左伝・襄公二十一年』である。それは、春秋時代に、晋国が斉国を征伐した際、晋国の州綽が斉国の殖綽と郭最を捕らえたが、３年後州綽が斉国に避難した際、斉庄公は彼に殖綽

と郭最が如何に勇猛であったかを話した時、州綽は「彼らは野獣と同じで、とっくに射られ、その肉も食べられ、その皮も寝具となったのに、どうして勇猛だと言えるかい」と答えたという話である。

このように、ここでは、医学書や歴史書に記載されたものと現実の噂を交えて語っているが、いずれの例も必ずしも封建的礼教によるものとは言えないのであろう。

2. 4　人食いの方法

第６章はとても短くて、わずか二行しかない。この章では、趙家の犬の特徴を次のように叙述している。「真っ暗で、昼なのか夜なのか分からない。趙家の犬はまた吠え出した。ライオンのような凶悪な心、兎の臆病、キツネの狡猾」と。

第７章では、人を食う前に、その対象を殺す方法を暴いている。彼らは人食いをする時、直接手を下すのが嫌なのだ。しかもその勇気もない。なぜなら、祟りを恐れているからだ。したがって、「皆と結託し、罠を仕掛けて、自殺に追い込ませるのだ。……帯を解いて、梁にかけ、自分で首をくくって死ぬのが一番好都合なのだ。そうすると、彼らは殺人の罪もなく、目的をも達することができるので、大喜んで泣いたり、笑ったりするのさ」。

つまり、人食いをする人たちは、趙家の犬と同様に、凶悪な心を持ちながらも、臆病で狡猾である。その方法は、直接殺すことを避け、手段を講じ、間接的に殺すのである。ある本に『ハイエナ』の話がある。目つきも外観も醜くて、よく死肉を食い、大きい骨まで噛み砕いて食ってしまうという。「『ハイエナ』は狼の親族で、狼は犬の本家だ。この前、趙家の犬が何回か我をジロジロ見たから、共謀者になったに違いない」と日記に記しているように、人間は、狼や犬などの動物と同じ食い方をしている。しかも人食いをする時、痕跡を残さず、全部食い尽くしてしまうのである。

「我」はここでさらに疑問に思う。今回は、兄も他人とグルになって、「我」を食おうとするのだ。それはやはり昔から慣れているからなのか、あるいは、悪いとは思わないのか。それとも良心を失ってしまい、悪いと知りながらも、やはり食うのか。ここまで考えると、「我」は人食いの人を呪うのに、まず兄からにしよう。人食いの人を改心させるには、まず兄から始めようと決心した。

このように、「我」は人食いの社会を深く認識することができて、それを改良しようとした。

3. 啓蒙しようとする「我」

次に、第８章から第10章によって、「我」がどう啓蒙しようとしたのかを見てみよう。

3. 1　啓蒙の試み

日記の第８章から第10章までは、周りの人を改心させようと試みるものとなっている。

まず、第８章において、夢の中で、以下のようにある若者に人食いが正しいかどうかを問い質した。

ふとある人がやって来た。年齢は20歳前後で、顔つきは、はっきり見えない。彼は満面笑みで、我に会釈した。彼の笑いも、どうやら作ったものだ。すると、我は彼にこう聞いた。「人を食うことは、正しいか」と。彼は相変わらず笑いながら、「飢饉の年でもないのに、人食いをするわけがない」と答えた。我はすぐ彼も連中の仲間で、人食いが好きなのだと分かった。我は勇気百倍で、「正しいか」と問い詰めた。

「何でそんなことを聞くの、まったく……冗談が好きですね。……今日の天気はいいですね」。

天気はいいし、月も明るい。でも、聞きたい。「正しいか」。

彼はどうでもよい顔をして、曖昧に「いいえ」と答えた。

「正しくない、じゃあ、彼らはなぜ食うのだ」。

「そんなことはない……」

「そんなことはないだと、狼子村では、今も食っているし、それに本にも鮮やかに書いてある」。すると、彼の顔色が変わり、青黒くなった。「たとえあるにしても、昔からそうなんだ」。

「昔からそうだとしても、正しいか」。

「あなたとそんな話をしたくない、とにかくあなたはそんな話をすべきじゃない、そんな話をするあなたが間違っている」。

我が飛び起きて目を開けると男の姿が消えた。全身汗びっしょりだ。彼は兄よりずっと年下で、連中の仲間に入っているなんてきっと母親が教えたのだろう。もしかしたら、すでに彼の息子にも教えていたのだろう。だから、子供すら凶悪な目つきで我を見るのだ。

この対話から分かるように、人は他の人に遇った時、作り笑顔で挨拶をし、都合の悪いことを聞かれたら、話を逸らしたり、悪いことは「昔からそうなんだ」という理由で、正当化したりする。しかも、それを親から受け継ぎ、そして自分の子供に伝えていくのである。

続いて第９章では、人間が置かれている社会的環境を分析している。「人は他人を食いたいのに、他人に食われるのを恐れている。すると、疑いの目で互いに警戒している」。「我」が思うには、人食いの考えを捨てて、安心して仕事をし、道を歩き、ご飯を食べ、睡眠を取れば、どんなに気持ちがよいことか。これが１つの敷居で、１つの関所に過ぎない。それなのに、彼らは親子、兄弟、夫婦、友達、師弟、仇敵でありながら、赤の他人とグルになって、互いに励まし、互いに牽制し、どうしてもそれを越えようとしない。

つまり、人間は、人食いの社会で生きていて、食われるのを恐れているにもかかわらず、決して人食いを改めようとしないのである。もちろん、ここでの人食いは、互いに騙し合い、互

いに排斥し合い、互いに陥れ合い、互いに利用し合い、互いに搾取し合い、互いに殺し合いなどの人間関係のメタファーとして用いられていると考えられよう。

3. 2　進化論の思想による「我」の説教

第10章は、13章の日記の中で最も長い章となっている。この章では、「我」は、進化論の思想を用いて、兄を改心させようとし、説得を試みた。その説得は２つのことを中心に行われている。

１つ目は、人間になって欲しいということである。「兄貴、当初、野蛮人は、大体人食いをしたでしょうが、後に考えが変わり、人を食わなくなる人も出て来て、ひたすらよくなろうとし、結局、人間になった、本当の人間になった。」しかし、「一部の者はよくなろうとしないので、今もなお虫のままです。これら人食いをする者は、人食いをしない者に比べ、どんなに恥ずかしいか。」

２つ目は、連中の仲間に加わることをやめて欲しいということである。まず、こう言った。「彼らは我を食いたい。兄貴一人ではどうしようもないでしょう。でも仲間入りする必要はないじゃないでしょうか。人食いの人は何事でもします。ですから、彼らは我を食うなら、きっとあなたをも食うのでしょう。仲間内でも互いに食い合うでしょう。」次に、直ちに改めれば、皆が平和に暮らせると説得した上で、「昔からそうなんだとしても、今改心し、人食いはだめだと言ったらどうでしょうか。兄貴、あなたが言えると信じています。一昨日、小作農が年貢を減らして欲しいと頼みに来た時にも、兄貴はだめだと断ったでしょう。」と提案した。

ここで、改心の説教をする時、小作農と年貢の話を持ち出しているのが、まさに地主と小作農との関係は人食いの関係だと言えるであろう。

しかし、「我」の説教は失敗に終わった。その説教を聞いた兄は、最初は冷笑するだけであったが、次第に目つきが凶悪になり、顔色もすぐ青黒くなった。外に数人が立っている人たちの中には、昔からそうだったから、人食いをすべきだと思っている人もいれば、人食いをすべきではないが、人食いをしたいと思っている人もいる。しかし、指摘されると、逆上し、しのび笑いをするのである。

兄貴もその様子を見ると、顔が凶悪に変わり、大声で「出て行け、瘋人を見て何が面白いだ」と怒鳴った。その時、「我」がやっと分かった。彼らは改めないどころか、すでに準備もできている。それは、「我」を「瘋人」と決めつけ、そのうち「我」を食っても、平穏無事であるばかりか、称賛する人がいるかもしれない。小作農が言う悪人を食ったのと同じやり方であり、これはいつも手口である。

それにもかかわらず、「我」は説得し続けた。「改めなさい、心の底から改めなさい。将来、この世には人食いの人は許されなくなるのだ。もし改めなければ、自分たちで食い尽くしてしまうのだ。たとえ子供をたくさん産んでも、本当の人間に滅ぼされるであろう。」と（日記第10章）。

このように、「我」が進化論の思想を用いて、兄を改悛させようとし、懸命に説得したところで、兄に「瘋人」だと見られているのである。注意すべきなのは、この説得は人食いを改めさせようとするものであり、礼教の遵守をやめさせようとするものではなく、また礼教を批判するものでもないということである。

4.「我」の最初の自覚

第11章と第12章では、妹が死んだ原因、そして自分も人食いの人かもしれないだということに気づいたことを述べている。

「我」の妹が５歳の時に死んだ。「妹は兄貴に食われた。母がそのことを知っているかどうか、我には知らない。いや、知っていたかもしれない、しかし、母は泣いていた時は、何も言わなかった。恐らく当たり前のことだと思っていたのだろう」（日記第11章）。ここでの「妹は兄貴に食われた」ということは、「我」の妄想であろう。恐らく妹が何らかの原因で死んだのは兄のせいだと思い込んでいて、兄に食われたという極端な表現で、人食いの社会の残酷さを表現しようとしているのであろう。

また、この物語の展開は、ここでやっと礼教が重視する「孝」についてちょっとだけ触れることになった。「我」は、まだ４、５歳の時、広間で涼んでいると、兄貴がこう言ったことを覚えている。「親が病気になったら、息子としては自分の肉を一切れ切り落として、よく煮て食べさせなければ、よい人とは言えないのだ。母もそれはだめだと言わなかった。一切れを食べてもよいなら、丸ごとだって食べられるのだ」（日記第11章）。礼教に影響されている中国の人々は、「孝」を最も重視しており、親孝行するため、たとえ自分の肉が必要とされても、それを出すべきであるという考えを持っていた。その意味で、ここでの記述は礼教との関係が見られると思われる。

そして、次の第12章において、「我」は自己分析をした。人食いをしているところに、「我」も長年暮らしてきた。そして妹が死んだ時、兄貴はその肉を料理に混ぜて、こっそり食わさせなかったとは限らない。ですから「我も知らずうちに妹の肉を数切れ食ったかもしれない。今は我が食われる番だ。4000年も人食いの歴史がある我は、当初は知らなかったとしても、今分かったら、本当の人間に顔向けができない」。

この章では、「我」は、自分が人食いの社会に生きていること、また自分も無意識のうちに人食いをした可能性があること、そして自分も食われる可能性があることを認識することができた。これは、「我」の最初の自覚になる。この自覚によって、人と人との関係、人と社会との関係を暴いているのであろう。

ここまで自覚すると、絶望的になるが、それでも最後の第13章で、「人食いをしたことのない子供はいるかもしれない。子供を救って」と叫んでしまう。これは「我」の吶喊である。

以上は、「我」が感じた人食いの社会である。日記では、「我」が感じた恐怖、「我」の説教、

そして「我」の最初の自覚と吶喊が書かれている。狂気に満ちたものとは言え、人間社会は人食いの社会であることをわずか13章の短い日記で見事に、そして深く掘り下げて描き出している。

人間は、人食いの社会で、互いに食い合い、決して改めようとしない、しかも数千年も続いてきている。それにもかかわらず、「我」が「子供を救って」と叫んだ。しかし、この「我」の「吶喊」を作者魯迅の主旨だと捉えるならば、序章の存在は蛇足でしかないのであろう。小説の冒頭に序章を置いてから、日記本文を出すには、それなりに深い意味があろう。以下では、序章を検討することにしよう。

5. 謎の序章

序章に秘められているメッセージを探るには、その内容を今一度吟味する必要があろう。序章は、古文体で書かれているが、現代日本語に訳すと次のようなものとなっている。

> ある兄弟、その名を伏せるが、ともに余の中学時代の友人で、長年会っておらず、消息は次第に途絶えた。先日偶然そのうちの一人が病気になったと聞き、帰郷の際に、ついでに見舞いに寄ったが、一人にしか会えなかった。病気になったのは彼の弟だと言う。遠いところからわざわざお見舞いに来てくれたのに、すでに病気が癒え、役人の候補としてある地に赴いた。かくして大笑し、当時の病状が分かるかもしれないと病中に書いた日記二冊を差し出し、旧友に献呈しても構わないと言った。持ち帰って読んでみると、意味不明で、荒唐無稽なことが多く、それに日付もない。墨色や字体の違いから、一時に書いたものではないと分かる。たまに連絡を取っている人もいるので、一部を抄録し、医学の研究に供したい。文中の誤記は、まったく修正していなかったが、人名は、皆村人にして、世に名も知れず、問題にならないとは言え、やはり名前だけは書き換えた。日記の題は、本人が回復後につけたもので、変えていなかった。７年４月２日記す。

このわずか数行しかない序章には、いくつかの謎が秘められていると考えられる。

第一に、「余」は果たして作者の魯迅なのか。周知のように、魯迅は新文化運動の指導者の一人であり、しかも「家族制度と礼教の弊害を暴露する」啓蒙者である。一方、「余」は、日記のことを、「意味不明」（語頗錯雑無倫次）、「荒唐無稽」（多荒唐之言）であると指摘し、しかもその序章を古文体で書いたのである。ここから、「余」も「我」の日記の内容を否定しているように読み取れよう。したがって、「余」は魯迅ではなく、ただこの小説に序章を加えるために設定されていた第二の語り手に過ぎないのであろう。

第二に、なぜ「我」が自分の日記を「狂人日記」という題をつけたのか。この小説には「狂人」と「瘋人」という２つの呼ぶ方が内在している。日記の第10章に出てきた兄の「出て行

け、瘋人を見て何が面白いだ」という言葉と、序章での兄の「大笑」からも、親族の兄までも、人々を啓蒙しようとする「我」を瘋人だと見ていることが分かる。それは、新思想に影響されていた「我」が当時の民衆の目には、正常者ではないと思われているのであろう。つまり、新しい時代が到来しようとしているのに、人々の意識は依然変わっていない、いや、変わろうとしないということになろう。その意味で、無知蒙昧な民衆を啓蒙しなければならないのである。一方、もし病人・精神障害者が書いた日記という意味で表現したいのであれば、むしろ「瘋人日記」という題をつけるべきであろう。しかしあえて「狂人日記」にしたのは、「我」のそれまでの社会に対する認識は、自分の生意気や傲慢さによるものであったことに気づきそれで、それまでの自分に対する自己否定なのではなかろうか。つまり、これは、「我」の二回目の自覚になろう。

第三に、なぜ日記を書いた「我」は「病気が癒え」、役人の候補としてある地に赴いたのか。もしそれまでの「我」が醒めた「反封建」、「反礼教」の戦士であったとしたら、「病気が癒え」という結果は、「反封建」、「反礼教」をやめたということになるのではなかろうか。言い換えれば、啓蒙者たる者は民衆を啓蒙することを放棄したことになろう。

以上のように、序章には、周りの人と「我」による二重の否定が秘められていると言えよう。ただし、「余」と兄は、「我」を「瘋人」・病人と見なしているが、「我」は過去の自分を「狂人」、つまり傲慢で生意気な人だと見ているのであろう。それ故、「我」は、「病気が癒え」、社会復帰し、役人の世界に入っていったと考えられよう。

この結末を理解するには、まず先駆的な啓蒙者はいつから現れ、何をしようとしたのかを振り返る必要があろう。

1840年のアヘン戦争により、中国は半植民地に陥ることとなった。その後、さらに日清戦争でも敗北した。そこで一部のエリートたちが強い危機感を抱き、社会を変革することで国を救おうとした。たとえば、19世紀の末から20世紀の初めにかけて、西欧の文化・思想に影響された厳復、林紓、辜鴻銘などのような先駆的啓蒙者たちが現れた。彼らは魯迅より20～30歳年上で、戊戌変法、辛亥革命などを経験したが、決して「反封建」、「反礼教」の戦士ではなかった。

イギリスに留学した厳復は、1895年に『論世変之亟』を発表し、「中国は三綱を最も重視するが、ヨーロッパは平等を最も重視する……中国は皇帝を尊ぶが、ヨーロッパは民衆を重視する」と指摘し、中国の伝統がどんなに長くても、どんなに優れていたとしても、現在の中国が直面している危機問題の解決には何も役に立たない、民衆を啓蒙しなければならないと主張した。一箇月後、また「原強」を発表し、国家の強さは武器にあるのではなく、意識と制度にあると説いた。李鴻章は厳復の才能を認めていたが、その傲慢さを気にくわなかった。よって、厳復は重く用いられなかった。後に、彼は翻訳に着手し、イギリスの科学者T.H.ハクスリーの『進化と倫理Evolution and Ethics』(1894)を中国語に訳し、『天演論』として出版された。その「優勝劣敗」・「適者生存」の進化論思想は多くの人に影響を与え、啓蒙的役割を果たして

いた。魯迅も、南京鉱路学堂で勉強していた時、三箇月の手当で『天演論』を購入し、一気に読んだ。当時18歳の魯迅は、『天演論』から多大な影響を受けていた。厳復は、科挙試験を廃し、近代学校教育を導入し、国民の意識を徹底的に変えなければ、国が富強になることができないと主張していた。当時の厳復はあたかも維新派の精神的指導者となった。彼は、「適者生存」だから、改革すれば、中国人は依然として生存していくことができると考えていた。彼は『天演論』を以て、中国社会に警鐘を鳴らした。しかし、清王朝が終わろうとし、武昌蜂起の際に、厳復は清王朝の統治を擁護し、君主の廃止に反対した。また、辛亥革命後、孔子崇拝を提唱し、そして袁世凱の帝政運動にも参加した。このように、厳復は、時代の先頭に立ち、啓蒙者、改良思想家となって活躍していたが、その後、袁世凱の帝政を擁護する者となった。また、林紓は早くからヨーロッパの文学作品を翻訳し、それによって啓蒙的役割を果たしたが、「五・四運動」の際、白話文運動に反対した。そして、辜鴻銘はイギリス、ドイツ、フランスに留学したが、革新にも、新文化運動にも反対した（劉再復、2010、P353−354頁）。

清朝末期に活躍した先駆的な啓蒙者たちの中には、社会の変革、人々の意識を変えようと努めていたが、心の底には決して「反封建」、「反礼教」の戦士ではなく、依然として帝政や伝統的なものを維持しようとした者がいる。民衆を啓蒙しようとする啓蒙者が封建的礼教に深く影響されているが故に、決してその思想的桎梏から抜け出すことはできない。これこそ病態社会に生きる啓蒙者たちが罹っている病であろう。

以上のように、この「序章」には第三の語り手の魯迅の意図が秘められているのであろう。

6. 小説の構造とその主題

以上で検討してきたように、「狂人日記」は日記と序章によって構成されており、それぞれに秘められた意味が異なっている。

日記本文は、人食いの社会とそこに生きる人々、改心させようとする「我」の試み、「我」の自覚、そして吶喊へのプロセスによって構成されている。日記の最後に、「我」による「子供を救って」という第一声の吶喊が上げられている。この第一声の吶喊は、人食いの社会に生き、決して改心しようとしない人々に対する「我」のような先駆的啓蒙者による叫びの声であろう。

序章では、「余」によって「我」の行く末を語られている。この序章には、「我」に対する作者魯迅による第二声の無言の吶喊が秘められていると考えられよう。

日記の中の「我」は、数千年も続いてきた人食いの社会を変革しようとする先駆的な啓蒙者であったが、結局社会に復帰し、しかも役人に世界に赴いた。これについて、伊藤虎丸は、「狂人日記」を魯迅の自伝的小説として読み解いている。伊藤虎丸によれば、魯迅は日本留学中に狂人のような「独り覚めた意識」が形成されていた。日記の中の「4000年も人食いの歴史がある我、当初は知らなかったとしても、今分かったら、本当の人間に顔向けができない」

という叙述について、伊藤虎丸は次のように解釈している。自分自身もまた「真実の人間」ではなかったということが、やっと自覚できたという意味を含んでいよう。魯迅は、ここで自ら加害者であったことを認識したことで、普通の人間になり、社会に復帰した（伊藤、226頁）。また、代田智明は、「『狂人日記』を魯迅の『自伝的告白小説』として読むことは、完全にはできないとしても、部分的にある意味では可能である」（代田、44頁）と指摘している。狂人の社会復帰については、代田智明は、当時の啓蒙者に対して自らの加害性を認識すべきだという警鐘を鳴らしていると解釈している（代田、48頁）。

筆者は、「我」の吶喊は魯迅の吶喊でもあり、そして「余」の「医学研究に供する」の言葉は、魯迅の言葉でもあると考えているが、基本的にこの作品には、序章を語る「余」と日記を語る「我」のほかに、小説を語る第三の語り手の魯迅の三者が別々に存在していると考えている。「我」の役割は、人食いの社会を暴き、人食いをしている人々を啓蒙することである。また「余」の役割は、序章で「我」の行く末と日記公表の経緯を語ることである。そして、作者の魯迅は、小説の外側に立ち、全体を見つめて、「我」に代表される一部のかつての先駆的な啓蒙者たる者を批判的な目で見ている。

「我」は、人食いの社会に対して深い認識があっても、日記本文から決して「反封建」、「反礼教」といった強いメッセージが中心となっているとは読み取れない。つまり、「我」は人食いの社会に対する憎悪の念を抱いても、封建社会や礼教に対して同等の気持ちを持っているとは言えない。それ故に、結局、「病気が癒え」、役人の世界に入っていったのであろう。そこで魯迅は、この「狂人日記」を通して、一部の先駆的な啓蒙者の「病」を暴露し、治療の喚起をしたかったのであろう。またこの意味で、はじめて「家族制度と礼教の弊害を暴露する」として捉えられるのであろう。

この短編小説は、序章と日記本文によって構成されているため、代田智明も述べたように、入子型の構造となっている（代田、24頁）。しかし、代田智明が言っている語り手は「我」と「余」の二人であるが、筆者は、「我」、「余」、作者魯迅の三人の語り手がいると考えている。この小説に日記本文のほか「序章」を加えたことで、魯迅自身の意図が投影されることになっていると考えられる。

日記本文の語り手「我」は、わずか13回分の短い日記に人間社会の人食い現象を凝縮させ、人々を改悛させようと試み、さらに「子供を救って」との第一声の吶喊を上げている。この第一声の吶喊は人食いをする人々に向けられていて、人間を救おうとしたものである。序章の語り手「余」は、「我」が癒え、役人の候補としてある地に赴いたこと、日記の由来と「我」が自ら自分の日記を「狂人日記」という題をつけたこと、そして日記を公表する経緯と「医学研究に供する」という目的を語っている。小説の語り手の作者魯迅は、人食いの社会を改良し、人食いをする人々を改心させようとし、結局自己を否定してしまうような啓蒙者が罹っている病を暴き、第二声の無言の吶喊を上げているのであろう。この一部の先駆的な啓蒙者に向けられた第二声の吶喊こそ小説の主題なのではなかろうか。

【注】

１）『魯迅全集』第６巻、人民文学出版社2005年、247頁
２）「我怎么做起小说来」P507『魯迅作品精選』長江文芸出版社2006年
３）小説の日本語訳は藤井省三が翻訳した「阿Ｑ正伝」（2011年）を参考したところが多い。

【主な参考文献】

伊藤虎丸 1975『魯迅と終末論―近代リアリズムの成立』龍渓書舎
代田智明 2006「出発の傷跡―『狂人日記』の謎」『魯迅を読み解く』東京大学出版会
朱棟霖、朱晓進、呉義勤主編 2014『中国現代文学史1917-2013』高等教育出版社
鄭万鵬 2007「魯迅小説」『中国現代文学史』華夏出版社
童秉国編 2006『魯迅作品精選』長江文芸出版社
藤井省三翻訳 2011「阿Ｑ正伝」『故郷／阿Ｑ正伝』光文社
劉再復 2010「魯迅成功的時代原因与個人原因」『文学的反思』福建教育出版

（令和２年10月５日受理）